

逞筆模試

■仁の巻

十月十七日

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。①～②③は音読み、④～③④は訓読みである。

(30)
1×30

- ① 隋堤の蓼穗は紅なり。
- ② 綺羅、橋上に聯翩たり。
- ③ 天蚕糸を製して釣緒と為す。
- ④ 伊尹の状は面に須麋なし。
- ⑤ 虎賁は巖を釈き、寇は鬬を伺う。
- ⑥ 雨露の潤す所、始めて苒苒を生ず。
- ⑦ 天命に属して之を咸池に委ねん。
- ⑧ 大礼を論じ謫戾せらる。
- ⑨ 神明権迹を垂れて七千余座。
- ⑩ 両条の臂膊、水牛般の気力あり。
- ⑪ 偈偈乎として仁義を掲ぐ。
- ⑫ 芙蓉鸂鶒図は松村月溪の代表作。
- ⑬ 策を挟みて書を読み。
- ⑭ 馬載驢駝鉄船に上す。
- ⑮ 陣中の床几に天草が腰かける。
- ⑯ 影は瀾瀾たる波の中に沈む。
- ⑰ 埵を捏ちて形を造り火中に投ず。
- ⑱ 後宮の十妃、皆綢紵を衣る。
- ⑲ 温風始めて至り、蟋蟀壁に居る。
- ⑳ 天は粵宛を為し、艸木養長す。
- ㉑ 拉げ帽子の下で眇を光らせる。
- ㉒ 成器は調みざれば用いず。
- ㉓ 蚊の膈に鑢をかける。
- ㉔ 読経の音が窟に飀する。
- ㉕ 屠門に撞入して怎でか放たれん。
- ㉖ 地域振興事業に力瘡を入れる。
- ㉗ 谿き者は速やかに涸る。
- ㉘ 鹿毛駁の貢馬一疋、尉に進す。
- ㉙ 瘦鶴をして風に舞って鸞はしむ。
- ㉚ 冠敝ると雖も必ず首に加う。

解答難度指数 2.01

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。①⑨、②⑩は国字で答えること。

(40)
2×20

- ① 農作物のザンサが鳥獣の餌になる。
- ② 軍楽隊がトモの甲板で奏楽をやる。
- ③ 真昼の太陽がカクヤクと照り付ける。
- ④ 豪奢な波斯ジュウタンの上を歩く。
- ⑤ 病院をタライ回しにされる。
- ⑥ 患ふざけがお寺様のジダに触れる。
- ⑦ 臆面もなくロウレツな手段に出る。
- ⑧ 水面のホフクケイに目高が棲む。
- ⑨ シンイセツに基づき改元が行われた。
- ⑩ クイゼンとして零丁孤苦を嘆ずる。
- ⑪ 境内のシヨロを伐つて撞木を造る。
- ⑫ 少々親のヒイキメが過ぎるようだ。
- ⑬ 言い効のないシッコシのない奴。
- ⑭ 数次の会戦を経てコウスイ状態に入る。
- ⑮ 聖寿のムキヨウと悠久を寿ぐ。
- ⑯ 尿検査でボウコウガンを調べる。
- ⑰ 花々がケンを競うように咲き誇る。
- ⑱ 伯氏ケンを吹き、仲氏カクを吹く。
- ⑲ 辛き世を気儘に遊ぶチドリかな。
- ⑳ アサリ蛤が糊売りをする。

(三) 次の1～5の意味を的確に表す語を、次の□から選び、漢字で記せ。(10)
2×5

- ① 青天白日の身となること。
- ② 中の十日。
- ③ 生前の徳行を尊んでつける名。
- ④ 君主の統治。貴人の御入来。
- ⑤ しかつめらしい。

えんぎしき・しごう・しよりん
せつえん・ちゅうかん・ちようこ
ついしょう・てんぼうせん

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1 次の四字熟語の(①～⑩)に入る適切な語を次の□から選び漢字二字で記せ。(20)
2×10

- | | |
|--------|--------|
| (①) 大家 | 籠鳥 (⑥) |
| (②) 暮塩 | 子為 (⑦) |
| (③) 帖耳 | 松風 (⑧) |
| (④) 萎靡 | 虚実 (⑨) |
| (⑤) 幼婦 | 玉石 (⑩) |

かんえん・こうけん・しちゅう
たいだ・ちようせい・どうき
ひまく・ふしゅ・ふいん
らげつ

問2 次の①～⑤の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)
2×5

- ① 大いに勇気を振るうさま。
- ② 取り越し苦労をするたとえ。
- ③ 時勢に応じた出処進退をする。
- ④ 百川海に朝すが如し。
- ⑤ 遠方の友を偲ぶ切々たる思い。

瞋目張胆・鴻興大樹・群蟻附羶
濯纓濯足・六鷁退飛・吳牛喘月
風鬟雨鬢・渭樹江雲

(五) 熟字訓・当て字の読みを記せ。

- | | |
|------|-------|
| ① 歩射 | ⑥ 蓐麻 |
| ② 建蘭 | ⑦ 恩賚 |
| ③ 紅絹 | ⑧ 石斑魚 |
| ④ 暗闘 | ⑨ 海桐花 |
| ⑤ 蒲葵 | ⑩ 昏鐘鳴 |

(10)
1×10

(七)

次の①～⑤の対義語、⑥～⑩の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

- | | |
|------|-------|
| ① 芻蕘 | ⑥ 蒼頭 |
| ② 賊虐 | ⑦ 直会 |
| ③ 壟断 | ⑧ 牙門 |
| ④ 狷狭 | ⑨ 大御心 |
| ⑤ 遷喬 | ⑩ 行路難 |

(20)
2×10

(八)

次の故事・成語・諺のカタカナの部分を漢字で記せ。

(20)
2×10

- (六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを送りがなかに注意して)ひらがなで記せ。
- ア ① 帰酢…② 帰る
イ ③ 狎昵…④ 昵む
ウ ⑤ 和兌…⑥ 兌ぶ
エ ⑦ 秋獮…⑧ 獮り
オ ⑨ 朝聘…⑩ 聘う

(10)
1×10

いあく・かつじよ・きく
きようえん・きんてん
しんきん・しんしん・そうれい
ぶじゅつ・へんさん

- ⑦ 鳳凰笏に在りケイボク翔舞す。
⑧ ケンカ玉樹に倚る。
⑨ 閻魔を抹香でクスベたよう。
⑩ 名は実のヒン。

(九) 文章中の傍線(1.～10.)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(30)
2×10
1×10

【A】 遼かなるかな三代。一洪荒を隔つるが如し。今にして聖道を知らんと欲する者、何を以てせんや。古文此れのみ。然れども雅誥聖典、多く残欠に属すれば、則ち彼の後儒の折中し難きも、亦已むべからざるの勢なり。故各々雄弁を鼓して以て経を説くと雖も、或いは疎或いは誕、或いは性或いは理、務めて自ら封殖し、徒にア棘を冒して、坦塗に就くを知らず。曉曉紛紛、イ聚訟止まず。ウ願より以降、先王孔子の道、存すと雖も、なお亡びたるがごとし。我が国家文明の化、伊物二氏の出ずるありて、而して大いに發揮する所ありと雖も、然れども亦多く諸を其の臆に取る。故に其の論撰する処は古、古に非ず、徴、徴に非ず。他なし、諸を古文に熟稽せざればなり。吾が兼山先生之を憂うるあり。業を振衣岡に開き、古学を振起す。故に其の所を攻むるや、漢以後の諸儒に階せず、直ちに洙泗にオ湧り、鄒魯に道き、優游1.【エ】、久しくして之に熟す。則ち文意互発、左右原に逢う。是に於いて洙泗の道2.【サンゼン】として具わる、豈美ならずや。先生常に嘆じて曰く、世儒学に通ずるを以て自ら処り、胸に3.【ニユウ】を蓄うと雖も、道、其の道に非ず、要、其の要に非ず、遂に先王の宮牆を窺う能わず。況んや其の宗廟百官の美をや。諸を4.【コク】の蓋なく、輻の4.【コク】なきに譬う。皮の存せざれば、毛將に安にカ傳かんやと。信なるかな言や。故に古経を論ずるには、古言に熟するあり。古言熟して、然る後に古経は伝注をキ頼たずして自ら了たり。往には門人、先生燕居の談を録して、世に公にす。此れを前編と為す。今又將に後編を公にせんとす。此れ先生の5.【シヨ】と雖も、世の学者此に因りて以て其の三隅を反し、而して之を拡充すれば、則ち古先哲王孔子の道に於いて、其れなお諸を斯に視るがごときか。

(片山兼山「山子垂統・後編序」より)

【B】

大隈重信立憲改進黨を組織す。梓発企員となり、6.【キンキヨ】を組織して党務を整理す。改進黨の盛んなる7.【エンジ】に彰聞せしもの、梓与りて力あり。また専門学校を創立し子弟を薰陶するの挙あり。梓また協議員となる。言8.【コウケイ】に中たるもの多し。余暇あれば則ち著述に耽り燭を以て晷に繼ぐ。其の国憲汎論の如き筆に光彩あり。論弁浩蕩として江河の決するが如し。不朽の業期待に負かずと謂うべし。明治十七年甲申の九月病みて咯血す。往昔9.【ユウ】えず。十九年丙戌一月十一日溘然として長逝す。

桜所子曰く、梓其の学漢欧に通ず。然も淵博にして深邃なる。世上多く其の9.【ビツチュウ】なき所なり。況んや官に在りて剛正敢えて脅肩10.【テンシヨウ】の態をなさず。野に下りて政治家となる。漫に当局者を是非するのみにして、国憲の何事たるをも攻究せざるが如き徒輩に同じからず。刻苦勉励。東洋の一男児として大有為の人物たるを以て自ら任ず。不幸短命にして死す。また11.【コ】だ惜しむべきなり。

(干河岸貫一「明治百傑伝・小野梓」より)

(注) 棟…車上に建てる蓋の骨。